

のぐちうじょう
野口雨情

童謡の詩人 北茨城市



(北茨城市教育委員会提供)

明治15年(1882) - 昭和20年(1945)。多賀郡磯原村〔北茨城市〕生まれ。本名は英吉。中学卒業後、東京専門学校高等予科文学科〔早稲田大学〕へ入学、坪内逍遙と知り合う。父の死去により帰郷し家督を継承するが、新聞記者として北海道へ渡り、石川啄木と出会う。帰京後、自主的に詩作活動を続け、妻との離婚の後、湯本町〔いわき市〕、水戸市へと移り住み、「茨城少年」の編集にあたりながら童謡作品を数多く発表する。西条八十等の紹介で児童雑誌に童謡作品の発表を開始し、その後、「船頭小唄」「七つの子」「赤い靴」「青い眼の人形」等の数多くの作品を世に出す。その間、全国各地への童謡・民謡普及のための講演旅行を行い、その範囲は国内のみならず当時の台湾、朝鮮、満州、蒙古にまで及んだ。

野口雨情は、多賀郡磯原村〔北茨城市〕の名家野口家の長男として生まれました。地元の尋常小学校を卒業すると、東京へ出て文学について学びました。このころ、坪内逍遙をはじめ内村鑑三、幸徳秋水など著名な人の話をきいて、自分も何かやらなければいけないと痛切に思うようになりました。特に、恩師である逍遙から「ローカルカラーを主とした歌に力を注いでみたらどうですか。」という助言を受け、雨情の進むべき道が決まったといわれています。

(詩を作って自分の考えを発表し、世の中のために役立てたい。) こう考えた雨情は、大学を中退し、作詩活動を続けました。ところが、父の急死をきっかけに磯原の実家にもどり、家を継ぐこととなります。しかし、そこで待っていたのは、父の残した借金を返すための苦しい生活でした。そのため、雨情は、自分をなぐさめてくれる詩や俳句の世界によりいっそう打ち込むようになりました。地元で詩作にはげみ、民謡詩集『枯草』を自費出版しました。この詩集は、個人の民謡詩集として、後に高く評価されました。

雨情は、北海道から樺太などの放浪の旅にでた後、一時、東京へもどり、苦しい生活の中でも、民謡を一生懸命書き続けました。そのころ、月刊のパンフレット民謡詩集『朝花夜花』を出すと、ようやく雨情の文学的名声が高まってきます。この詩集には、「七つの子」の原形である「山鳥」がありました。「七つの子」は、大正10年(1921)になって児童文学雑誌『金の船』に本居宣長(江戸時代後期の有名な学者)の子孫にあたる本居長世の作曲により発表されました。



歌碑「七つの子」(常磐道・中郷SA内)

からす な かな かな かわい
鳥なぜ啼くの 鳥は山に 可愛七つの 子があるからよ
可愛 可愛と鳥は啼くの 可愛 可愛と 啼くんだよ
山の古巣に いつてみて御覧 丸い目をした いゝ子だよ

この詩には、次のようなエピソードがあります。

ある日、長男を連れて裏山に行ったら、ちょうどカラスが鳴いていました。雨情は長男に向かって、「カラスは何て鳴いているんだろう。」と尋ねます。長男が、あまりに急な質問にとまどっていると、その時すぐにポケットから手帳を取り出して、鉛筆で何かメモをしていたそうです。農民たちにとっては、いたずら者、にくまれ者となることが多い真っ黒なカラスも、雨情の目を通してみれば、愛情に満ちた親ガラスと親を信じて待つ純真な丸い目をした可愛い子と写ったのでしょうか。

(童謡は子どもの歌だから、子どもにとって興味深いものでなければならない。そして、同時に大人にとっても、その童謡を聞いたり歌ったりすると、忘れていた子どものころの思い出がよみがえってくるものでなければならない。そのような童謡こそが芸術的な作品なのだ。そんな童謡を作り続けよう。)

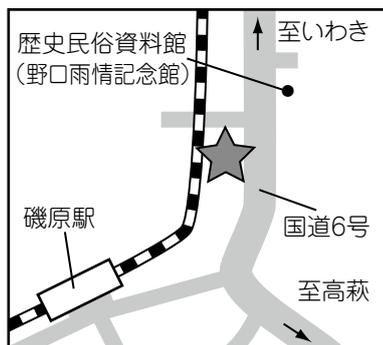
雨情は、昭和20年(1945)に亡くなるまで、常に民衆の間うたい継がれてきた童謡・民謡を芸術的な水準にまで高め、民衆の中に生きる芸術として育てたいという目的意識をもって創作活動を続けていきました。

ゆがりのスポットに行ってみよう

野口雨情生家

所在地 北茨城市磯原町磯原 73

内容 徳川光圀もしばしば訪れ、光圀は海を見渡せる美しい景観から、ここを「観海亭」と命名したといわれています。雨情の遺品などが展示されています。



おもな 参考文献

『野口雨情の生涯』(長久保片雲・暁印書館・1980)

『定本野口雨情(全八巻)』(未来社・1985-87)